

平成28年度 第1回 院内合同研究発表会抄録

期 日 平成28年9月27日（火）

会 場 講堂

座 長 竹中 勝信（副院長 兼 脳神経外科部長 兼 放射線科部長 兼 薬剤部長）

全職員参加型の危険予知シミュレーションの取り組みと今後の展望

宮部 将幸¹⁾ 西尾 優²⁾ 上野 博子³⁾
若田 きみ子²⁾ 後藤 泰代²⁾ 大西 一彦¹⁾
林 将希⁴⁾

- 1) 高山赤十字病院 医療安全推進課
- 2) 高山赤十字病院 医療安全推進室
- 3) 高山赤十字病院 看護部
- 4) 高山赤十字病院 医事課

当院では平成13年5月より全職種を対象にしたリスクマネージャー養成のためのワークショップを行っている。これは、現場での医療事故防止活動のリーダーであるリスクマネージャーを全部署に配置する目的で開始され、これまでに毎年24名、合計235名を養成している。

当院でのリスクマネージャーが行う医療安全活動のひとつに「現場でのインシデント・アクシデントの原因分析と、再発防止策の策定及び実践」がある。原因分析・再発防止策の策定をリスクマネージャーのみに任せるのではなく、現場職員全員が参加し、より効果的な対策を見いだせることを目的とし、平成17年5月より「危険予知シミュレーション」を開始した。これは当院オリジナルな取り組みであり平成27年度までに66回を開催した。

その特徴としては、現場で発生した実際のインシデント・アクシデントの事例を基にリスクマネージャーだけでなく、現場職員が全員参加し原因分析を行い、危険予知システムを構築することである。改善点を明確にするために実際に起こってしまった事例を周知してもらうためのNG版と、改善策を考えた上でのOK版の体験型+劇場型（ロールプレイ）のシミュレーションを実演している。自部署の視点だけでなく、他部署との連携による改善等、病院幹部へのハード面の改善の必要性の理解にも繋がっている。

そこで、「危険予知シミュレーション」の取り組みと今後の展望について報告する。

ドセタキセル非エタノール製剤は先発品と比べ浮腫発現リスクを高めるか

洞口 拓也¹⁾ 和田 泰明¹⁾ 上田 秀親¹⁾
井川 愛子²⁾ 竹中 勝信¹⁾

- 1) 高山赤十字病院 薬剤部
- 2) 高山赤十字病院 外科

【背景】先発品のドセタキセルは溶解液にエタノールを含むことから、アルコール不耐症の方や外来化学療法を受ける際に車を運転される方に対しては付属の溶解液を用いずに薬液の調製を行う。2015年6月よりニプロ社よりドセタキセルの非エタノール製剤が販売され、先発品と比べ薬剤費の減少や調製の時間短縮などのメリットから当院でも採用し、新規対象患者から順次切り替えて化学療法を行った。外科の医師より切り替え後患者から浮腫を訴えることが増えたと薬剤部に報告があった。ドセタキセルの副作用に浮腫があるが、これまでにエタノールを溶解液に含む先発品での発現報告はあるが、非エタノール製剤と浮腫の発現について比較検討された報告はない。

【方法】2011年10月から2016年9月の間に当院の外科で化学療法を行った乳がん患者を対象集団とした。そのうち先発品のドセタキセル投与群21例をコントロール群、非エタノール製剤投与群12例を被験薬群として後方視的ケースコントロール研究を行った。浮腫の有無等は電子カルテの診療記録から調査した。患者背景はStudent's t-testを、浮腫の発現比較はFisher's exact probability testをそれぞれ用いて統計的有意差があるか検討した。

【結果】各群の患者背景を比較したところ、コントロール群に対して被験薬群の相対治療強度（RDI）が有意に高いことが分かった。そこで、RDI95%未満を除外して比較したところ、ドセタキセル投与後に浮腫が発現した症例は、コントロール群11例中8例、非エタノール製剤群11例中8例であり有意差はなかった。コントロール群においてRDI95%以上の群と95%未満の群を比較したところRDIが95%以上の群において浮腫発現割合が有意に高かった（ $P < 0.01$ ）。

【考察】結果よりドセタキセル非エタノール製剤は先発品に比べ浮腫発現リスクを高めるとはいえないことが示唆された。RDIが95%未満の群において95%以上の群よりも浮腫発現割合が少ないことから、RDIを下げることで浮腫の発現を回避できる可能性が示唆された。しかし、今回の調査が後ろ向きであることから、詳細な検討については今後の検討課題である。